sweet game

RAN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｓｗｅｅｔ　ｇａｍｅ

【Ｎコード】
Ｎ５３２２Ｔ

【作者名】
ＲＡＮ

【あらすじ】
甘いものが好きな彼と、甘いものが苦手な彼女。
ある日、彼女が彼にゲームをしようと言い出して？

※サイト、ｄノベ転載

私はは今非常にイライラしている。

なぜか？

それは、目の前でいかにも甘ったるそうな白い生クリームだらけのパフェをおいしそうに食べている男が目の前にいるからだ。

私は甘い物が大っ嫌いなんだ！

私は、なんとか彼を甘い物から引き剥がせないか考えていた。

男なのに甘い物を！　という考えが偏見なのはわかってる。

そういうのがないことはないが、彼の外見からしても似合ってないことはない。

問題はそこじゃなくて、彼の甘い物への執着ぶりがひどいのだ。

彼と会う時に、甘い物を見たことがないという記憶がない。

必ず上着のポケットには何か甘い物が入っている。

いや、いいんだ、それも。許せないことじゃない。

ただ、彼が私にもそれを勧めてくるのが耐えられないんだ！

見てるだけでも嫌なのに、ついさっきだって食べてるパフェを食べさせようとしていた。

食べれるなら食べたいが、残念ながらそれだけは勘弁してもらいたい。

だから、私はあることを思いついた。

「純、私とゲームをしないか」

「ん？」

やっと最後の一口を食べ終えた彼――純に私はそう持ちかけた。

純はきょとんとした顔で私を見た。

実年齢よりも幼く見えるその顔でそんな表情をされると、このまま彼をさらってどこかに行きたくなったが、それはなんとか抑えた。
「今日から一ヵ月、互いに大好きなものを我慢するんだ。できたら、一日だけ相手の言うことを聞く」
「なんで急にそんなこと言うのさ？」
純は相変わらずきょとんとした顔をして聞き返す。
確かに、もっともな疑問だ。
だが、別にどうということはない。
「なんとなく、おもしろそうじゃないか？」
「うん、そうだね」
あたしがそういえば、彼はたいていのことに同意する。
たまに情けなくなる時もあるが、今は気にしないことにする。
彼も、本当に嫌ならさすがに反対するだろうと信じている、というのもあるが。
「決まりだな。それで、我慢するものだけど、純は甘い物で、私は酒ってのはどうだ」
「そうだね。実咲ちゃんお酒好きだしね」
純はのほほんとした笑顔を私に向けてくれた。

――してやったり。

私は、心の中で拳を握って笑みをうかべた。
「よし、それならさっそくだ。今この瞬間から、純は甘いものを、私は酒を口にしたら負けだからな」
これで純の甘い物への執着を少しでも和らげられれば……。

あれから私と純のゲームは始まった。
私は、仕事仲間と飲み会をしたって酒には手を出さなかった。
非常に、辛い……。
そういう場では絶対に酒が勧められるので、適当にかわし、適当

な時間に切り上げるのが一つのテクニックである。
純も実は私と同じ会社で働いており、部署は違うものの、たまに飲み会が一緒になることある。
そこで見る彼は、なごやかに楽しく過ごしていた。
彼は酒は全く飲めず、それは周知の事実で、しかも誰も彼に無理に酒を勧めようともしないので、彼はそれで過ごせるのだ。
その人柄のせいなのか。私は、それをなんだか素直には喜べなかった。

「悪い。私そろそろ帰る」
またこのセリフを言わなければならないのか。
できれば言いたくない、このセリフ。
だが、言わなければ私がもたない。

「あ、じゃあ俺も帰ります」
すると、純もそう言って席をはずした。
「なんだよ、彼女が帰るから帰るってのか？　つれねぇヤツだな～」
「もう、飲みすぎだよ。いい加減にしときなよ？」
仲間からそのような声があがるが、純はいつものヘラヘラとした顔でそう言ってよける。
この仲間の間では私達のことは周知の事実だったりする。
いいのだろうかと思いつつも、私はみんなの好意に甘えている。
いい仲間を持ったものだ。
そうして、彼と私は帰路についた。
彼も私も何も言わないけど、帰りは一緒ということになっている。
彼はいつだって何も言わない。だから私も言わない。

ゲームを始めて二週間。
もうすぐ折り返し地点といったところか。
今のところ順調にきている、と感じていたそんな時だった。

私の仕事仲間から不穏な噂を聞いたのだ。
彼女は同僚の中で一番仲が良く、純と私がしてるゲームも知っていた。

――――純がこのあいだ大量にチョコを買い込んでたわよ。

食べる以外にチョコいったい何に使うというのだ。
これは明らかに彼がルール違反をしているということに違いない。
このゲームは、お互いの信頼関係で成り立っているというのに、これではこのゲームの意味がない。
そして、私の勝手な独りよがりであるのはわかってるが、私の思いが全然純に伝わっていないのではないか、という気持ちも起こさせた。
私は、悲しかった。

そんな今は土曜日の朝。
とりあえず、私は彼に電話をした。
この事実を知ってしまっては、私も黙っているわけにはいかない。
私が黙っていれば、彼は一生何も言わないままだろうから。

「はい」
電話の向こうで純の声が聞こえた。

「実咲だけど、ちょっと話したいことがあるんだ。今いいか？」
「うん。何？」
「あのさ、友達から、純がチョコ大量に買ってるって聞いたんだけど、本当なのか？」
「……」
純からの返答が詰まる。あたりか。
私は悔しい気持ちが沸々とわきあがってきて、ついきつい口調に

なった。
「私は純を信じてたのに、これってどういうことなんだ。最悪だ。もう、信じられない」
私はそこで電話を切った。
これ以上、彼を責めたくなかった。私の悪い言葉を聞かせたくなかった。
こんなことで怒ってる私をなんと馬鹿なヤツだろうと思うことだろう。
私も、何をこんなゲームでここまで悔しがっているのだろうと思う。
でも、きっと私はこのゲームに、彼との心のつながりを求めていたのではないかと、今なら思う。
だから、それが裏切られたというのは、私の思いが通じなかったということのように感じていた。
でも、それはやっぱり私の独りよがり。純は悪くない。

だけど……今は純に会いたくなかった。

だが、それからしばらくして、日も傾き始めた頃、玄関のチャイムが鳴った。
誰だろうかと、私は玄関へ向かった。

「！」

玄関を開けると、そこには今は会いたくない彼がいた。
今は、困ったような笑顔で私の前にいる。
彼はいつだって笑顔だ。それが時に私を苛立たせる。
でも、それは彼の性格だって知ってる。その笑顔の裏に色々な気持ちを隠してることも。
それも、私は彼のことを理解できないのか、と思わされる理由の

一つだった。
今はそれが辛くて、思わず目をそむけた。
彼の顔を見てたら、泣きそうになる。
その視線の先に、茶色の紙袋が見えた。

「実咲ちゃん、僕の話を、聞いてほしいんだけど……いい、かな？」

このドアを閉めればいいのに、それだけなのに、私は手が動かない。
私は純なしでは生きていけないって、体が言っている。私はどうしようもないヤツだ。
私は、ドアを少し押して、大きく開いて、そのまま中へ入った。
純は押されて開いたドアを手で止め、中に入ってきた。
私はそのまま部屋のソファに座る。
純は、ソファの横で突っ立って、私をじっと見ていた。
そんなに見られたって、困る。

「実咲ちゃん、これ見て」

純はそう言うと、テーブルの横に座り、先ほどから持っていた紙袋の中身をあけた。
中から、包み紙にくるまれた小さなチョコがたくさんこぼれてくる。
私は黙ってそれを見ている。喋る気力なんて、ない。

「たぶん実咲ちゃんはこれのせいで誤解してるんだと思う。
僕はこれを確かに買ったけど、一つも食べてないんだ。
実咲ちゃんとの約束を僕が破るわけないじゃない」

私はやっぱり口さえも動かす気はおきない。

わかってる。純は真剣だって。ごまかしなんかしてない。
こういうのが、いつもの純なんだ。
だけど、これじゃあ、何も変わらない。私の欲しい答えじゃないんだ。

「ねぇ、実咲ちゃん、なんか言ってよ。黙ってないでよ」

下向きで、どこにも視線を合わせていない私の手を、純が握ってきた。
自然と、心臓の鼓動があがる。
純から何かをすることなんてなかったから。

「やだよ、実咲ちゃん。僕を嫌いにならないで。僕から離れてかないで。どこにも行かないで」

私の手を握る純の力がどんどん強くなる。
痛い。純の気持ちも、これくらい今は痛いのだろうか。
鈍く、心に沈む痛み。

「僕は実咲ちゃんのことが大好きなんだ。だから傷つけたくない。
僕は実咲ちゃんの悲しむことはしたくない。
僕は、どうすれば許されるのかな」

純の悲痛な声が胸に響く。
やっぱり私は彼を信じてる。彼はこんな声を演技で出せるような人じゃない。
もう、耐えられない――！
私はテーブルに山になっていたチョコを一つ取り、口に含む。

「み、実咲ちゃ……！」

甘く粘つく感覚に嫌悪を感じつつも、私はそのまま純の唇に自分の唇を重ねた。

「……」

しばらくそのままの時間が続いた。

私は、彼の口に自分の口に含ませたチョコを入れる。深く、深く。

私の口の中の甘味がなくなると、私は唇を離した。

「口をきかなかったのはルール違反の罰ゲームだ。そして、今ので純の負けだな。甘いものを口にしたから」

純はしばし呆然と私を見ていたが、私の言葉がちゃんと頭に響いたのか、今度は嬉しそうに顔をほころばせた。

「……ありがとう」

だから、その笑顔が反則なんだって。

私はますます恥ずかしくなって、純とは反対の方を向いた。

そちらは窓で、カーテンを閉め忘れていたから、外の様子が見えた。

もう、ちょうど日が沈んで、少し暗くなっていた。

こんな時間からじゃ、たいしたことはできないな。

「あのね、実咲ちゃん。僕はこのゲームもし勝ったら、お願いしたいことがあったんだ」

そういえば、純はゲームに勝ったとしたら、私に何をさせるつもりだったのだろうか。

少し気になって、私は純の方に顔を向けた。

「僕は実咲ちゃんが悲しむのは嫌だ。

でも、それでも実咲ちゃんに、嫌いな甘いもの食べさせようとし

てたのは、賭けをしてたからなんだ」
「賭け？」
反応をもらえたのが嬉しいのか、純は嬉しそうにうなずいて、続ける。
「実咲ちゃんは嫌いだけど、僕の好きなものを、実咲ちゃんが受け入れてくれたら、
実咲ちゃんは僕を本当に受け入れてくれるって。賭け、っていうか、願掛けみたいなもんかな。
だから、僕は実咲ちゃんにこれを食べてもらおうと思ってたんだ」
純の笑顔に少し影が入る。
私は、急に馬鹿らしくなって、笑ってしまった。
結局私達は、お互いがお互いを気遣いすぎてすれ違っていたようだ。
「私達ってバカみたいだ。二人とも同じことを考えていたんだ。
それにしても、まだゲームが終わるまでに日があるのに、もう勝つつもりだったのか？」
「ううん。僕はこれで実咲ちゃんに勝つつもりだったんだ。このチョコ、実はお酒入ってるんだよ。
だから、これを食べれば、お酒を口にしたことになるじゃない。
これを食べてもらうことが、僕の勝ちと願いを同時に達成することになるんだ」
私は純のその言葉に凍りついた。
「まさか、そんな……」
「そう、正確に言えば、僕の思うとおりになったってわけだ。
実咲ちゃんはこれを口にしてくれたんだもの。だから、この勝負

は、僕の勝ちだよ」
そう言うと、純の笑顔が変わった。
それは、私が今まで見たことのない純の笑顔だった。私の知らない男の人の顔だった。

「そんなの認められないって言われるかな～と思ったけど、実咲ちゃんも似たような手を使ったから有効だよね」
純はそう言うと、ソファの、私の隣に腰をおろした。
まさか、純がここまで考えてるとは思わなかった。
純は、意外と、私より色々なことを考えているような気がした。
今までのことでも。
こうなると、どっちが主導権を握っているのかわからなくなる。
そして、私はそこでハタと気づいた。

「……あぁ、それは認める。だけど、純の願いはこれで果たされたんじゃないのか？」
純はいつもの笑顔で私を見ている。
だが、この笑顔ももはや信じられない。

「だって、今日一日言うこと聞いてくれるんだよね？　だから、他のことはその時考えようと思ってたんだよ」
「……それで、どうするの？　今日一日も残りわずかだけど……」
私は嫌な予感をひしひしと感じてはいるものの、聞かずにはいられなかった。
聞かないと、彼が強行手段に出そうだったから。
一回キレた純は怖い、ということを私は知った。

「……大丈夫。まだ日が沈んだばかりだもの。
夜は長いよ。……それにさ、やっぱりこのゲームちょっと終わり方が正攻法と言えないよね。

だから、先に仕掛けた実咲ちゃんには罰ゲームを受けてもらおうと思うんだ」
「なんだ、それは……」
「……さっきのお返しだよ。今夜は寝かさないから」
そう言った彼の笑顔は、私の知ってる無邪気な彼の笑顔。
しかし、そこに本当に邪気がないのかと疑いたくなってきた。
私達は、お互いがお互いを気遣っていたのと同じように、その主導権も時と場合により入れ替わるのだ。
だけど、このゲームのおかげで、私達はお互い、より近くなれたと思う。

それは、きっといいことだったに違いない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5322t/

sweet game

2011年5月24日23時40分発行